

18	豊田	上郷中学校	コンドウ ユウタ
			氏名 近藤 勇太

分科会番号	12	分科会名	自治的諸活動と生徒指導（中学校）
-------	----	------	------------------

**学校のきまりやルールについて考え、主体的に学校生活を送ることができる生徒の育成
— 生徒会が主体となった「学校生活アップデート」の活動を通して —**

1 主題設定の理由

大阪府の高校で、校則を理由に地毛である茶色の髪を黒く染めることを強要された生徒が不登校になってしまったことが発端となり、日本の学校教育における理不尽な校則「ブラック校則」がメディア等で取り上げられることが増えた。時代背景を踏まえて、今まで当たり前としていた校則を見直す機会と捉えていくことが必要となっている。

令和4年12月に改訂された生徒指導提要では、生徒指導の目的について、児童生徒一人一人の個性の発見、よさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること。その目的を達成するためには、児童生徒一人一人が自己指導能力（深い自己理解に基づき、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択、設定して、この目標達成のため、自発的、自律的かつ他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力）を身に付けることが重要であると示されている。

これらの現状を踏まえ、学校生活におけるきまりの見直しを生徒会が主体となって行うことで、きまりの意味や学校全体に必要なきまりとは何かを考え、きまりやルールの重要性を感じ、規範意識をもって行動することができるようになるのではないかと。また、生徒たちが自身の学校生活を振り返り、よりよい学校生活のために必要なことを考え、実践していくことで、行事やあらゆる活動に主体的に行動できるようになるのではないかと考え、本研究の主題を設定した。

2 本校の実態

本校は開校78年を迎える、豊田市南西部に位置し、令和4年度は1年生6学級、2年生5学級、3年生5学級、特別支援2学級、生徒数は500名を超える中規模校である。多くの生徒は明るく元気に登校することができているが、不登校や教室で過ごすことができない生徒も少なくない。教師の指示や話を素直に聞くことができる生徒が多い一方で、自分自身で考え、様々な活動に主体的に行動できる生徒は少ない。また、学校のきまりに対して、意味や意図を理解しようとせず、各自の解釈で判断して行動する生徒も多い。本校には、学校生活のきまりを示した「上郷中の1日」がある。登下校、朝の活動、授業の受け方、身なりや学習用タブレットの使い方について記載されており、生徒たちはこれを基に学校生活を過ごしている。

3 目指す生徒像

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 規律意識をもって学校生活を送ることができる生徒 ・ 級友とともに、学習や行事に前向きに取り組むことができる生徒 |
|--|

4 研究の内容と構想図

社会的な状況や生徒の実態を踏まえ、本研究では、生徒会が中心となって行う「学校生活アップデート」の活動を軸として、主体的に学校生活をよりよいものにしていくとする生徒の育成を目指す。学校での生活を振り返り、見直していくなかで「上郷中の1日」について考え、現在の学校生活に即したきまりに見直すことで、学校のきまりやルールを守ることへの高い意識をもった生徒の育成を目指す。

- 仮説1 生徒が主体となり、自分たちの生活をよりよくするために考え、その考えが反映されていくことで、きまりの意味や意図について考えるきっかけとなり、きまりを守る意識が高まっていくだろう。
- 仮説2 自分たちの考えが反映され、自分たちにとって過ごしやすい学校になっていくことで、学習や行事に前向きに取り組み、級友と同じ時間を過ごす生徒が増えるだろう。

仮説を検証するために、以下の手立てを実践していく。

手立て1 「上郷中の1日」の見直しと学校生活の振り返り

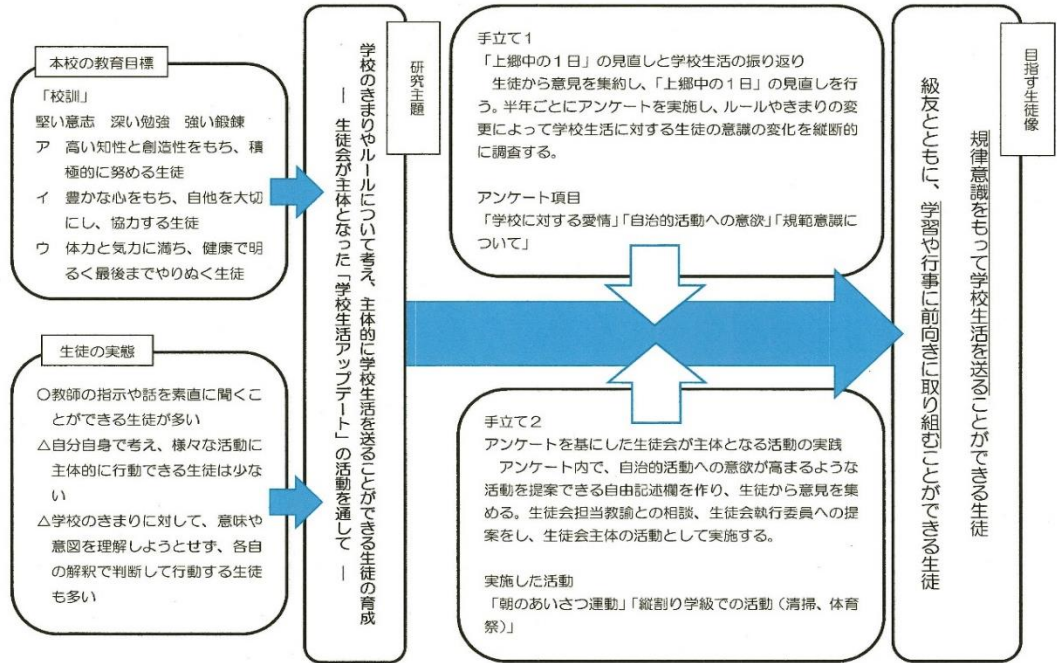
全校から集めた意見を生徒会執行委員が検討し、生徒会として生徒指導部に提案、話し合いを行い、きまりの見直しを行う。

半期ごとに学校生活を振り返るアンケート（4段階で評価）を実施する。

手立て2 アンケートを基にした生徒会が主体となる活動の実践

振り返りのアンケートに「どのような活動があると学校をよりよくしていきたいという気持ちが高まるか」という自由記述の項目を作り、生徒から意見を集める。

出てきた意見の中から、生徒会担当教諭と相談し、生徒会が主体となる活動として実施する。



資料1 研究構想図

5 実践と考察

事前に行ったアンケートでは、資料4のように、「上郷中学校が好きだ」「上郷中学校での生活は楽しい」という項目はやや低い。しかし、「自分たちの手で学校をよくしていきたい」「学校を創り上げたい」という意識をもっている生徒がいることがわかる。手立ての実践を通して、生徒の変化を追っていく。

手立て1 学校生活の振り返りと「上郷中の1日」の見直し

令和3年度末に実施した学校のきまりやルールについてのアンケートを生徒会執行委員が集計し、資料2のようにグループ分けを行い、生徒会としてきまりの見直しを検討していきたいものを挙げた。「靴や靴下の色について」白のみとしていたものを、靴はラインやマークが入っていてもいいのではないかと、靴下は白に限定せず、黒や紺などであれば汚れが目立たず、また選択肢が広がって購入しやすくなるのではないかと。「髪型について」男子のツーブロックを許可してほしい、女子の髪型を1つ結びだけでなく、選択肢を増やしてほしい。「学習用タブレットについて」学校のきまりとして上郷中の1日に明記したほうがいいのではないかと、という3点が挙げられた。生徒指導委員会で検討を行い、令和4年度から、

「靴・靴下について」

- ・「上郷中の1日」に記載なし（令和3年度）

→ 登校時の靴は白を基調としたもの

靴下の色は白・黒・紺とし、無地のもの（ワンポイントは可）とする。

（令和4年度）

「髪型について」

- ・男子の後ろ髪は長くしない（令和3年度）

→ 過度なツーブロックにしたり、極端に後ろ髪を長くしたりしない

（令和4年度）

- ・女子も髪を束ねるときは束ね方に注意する（だんご、斜めしばり、ちょんまげ、ハーフアップなどは不可）（令和3年度）

→ 女子は肩につく髪は束ねる。髪を束ねるときは受験に臨むにふさわしい姿を意識する。（令和4年度）

「学習用タブレットについて」

- ・「上郷中の1日」に記載なし（令和3年度）

→ 学習のために利用することや、アカウントやパスワードの管理等について記載。（令和4年度）

と変更し、新年度をスタートした。

7月に新しい「上郷中の1日」での学校生活についての振り返りや、新たに検討していきたくいまりについてのアンケートを実施した。「きまりが変更になって学校生活は過ごしやすくなったか」という質問に対して、「はい」と回答した生徒が多く、その理由として、「靴下の汚れが目立たなくなったから」「買うときに選択肢が増えてよかった」「自分で決められることが多くなったから」ということが挙げられた。その反面、「いいえ」もしくは「どちらでもない」と回答した生徒の理由として、「自分は変えていないか



資料2
見直したいきまりの分類

ら」というものが多くみられた。また学校生活についてのアンケートでは、全ての項目において、事前のアンケートよりもポイントが高くなっていた。

さらに検討していきたいこととして、防寒具についての要望が挙げられた。この点について、生徒会執行委員と直接話す場を設けた（資料3）。「タイツだけでなく、レギンスも許可してほしい」防寒具ということを見ると、タイツよりもレギンスを履いて靴下を着用したほうが温かい。男子は制服の中に着ることができるけど、女子はスカートなのでそれができないという意見が挙げられた。これらの意見を生徒指導委員会で検討、職員会でも検討を行い、令和4年度は試用期間として、認めていくこととした。



資料3
執行委員との座談会の様子

年度末に再度アンケートを実施した。「学校生活は過ごしやすくなったか」という質問に対して、多くの生徒が「はい」と回答し、理由として、「温かくなり、授業に集中できるようになった」という意見が多くみられた。また、学校生活についてのアンケートでは、すべての項目において、7月のアンケートよりもポイントが高くなっていた。特に、「自分たちの手で学校をよくしていきたい」「自分たちの手で学校を創り上げていきたい」という項目については、事前アンケートから0.2ポイント以上上昇していた。

手立て1では、全校から集めた意見を、生徒会執行委員と生徒指導部が連携し、学校のきまりへと反映していった。アンケート結果で特に、「学校をよくしていきたい」「学校を創り上げていきたい」という項目のポイントが高かった。このことから、自分たちが主体となり、学校生活をよりよくしていこうという思いで発した意見が、実際にきまりとして反映されたことで、自分自身が所属する上郷中学校に対する思いが強くなり、主体的に学校生活を送ろうという生徒が増えたと考えられる。また、「上郷中のルールを改めて考えることで、今あるルールをしっかりと守れるようになった」という生徒の意見もあり、きまりやルールを守ることへの意識を高めることができた。

		事前	R4 7月	R5 3月
1	上郷中学校が好きだ（好きになった）	3.06	3.19 (+0.13)	3.35 (+0.29)
2	上郷中学校での生活は楽しい（楽しくなった）	3.13	3.24 (+0.11)	3.40 (+0.27)
3	自分たちの手で学校をよくしていきたい（という気持ちが高まった）	3.28	3.33 (+0.05)	3.44 (+0.24)
4	自分たちの手で学校を創り上げたい（という意識が高まった）	3.21	3.29 (+0.08)	3.45 (+0.24)
5	ルールやきまりは大切だ（大切さがわかった）	3.49	3.56 (+0.07)	3.64 (+0.15)
6	ルールやきまりを守ることへの意識が高まった		3.53	3.63 (+0.10)

資料4 学校生活に対する意識の変化

手立て2 アンケートを基にした生徒会が主体となる活動の実践

振り返りのアンケートに「どのような活動があると学校をよりよくしていきたいという気持ちが高まるか」という自由記述の項目を作り、生徒から意見を集めた。生徒からは「生活に関わる活動」「みんなで取り組める活動」という意見が出た。出てきた意見の中から、生徒会担当教諭と相談し、「あいさつ運動をより活発にする」「学年を越えたつながりのある活動」を生徒会が主体となって実施することを決めた。

本校では、毎朝昇降口前に生徒が並び、登校してくる生徒と互いにあいさつを交わす取組が長年行われてきた。登校時間になると早く来た生徒から並び始め、最後には花道のようになるほど、多くの生徒が参加し、さわやかなあいさつが響いていた。しかし、新型コロナウイルスの感染が広まり、密集して大きな声を出すことが禁止され、あいさつ運動の活動も中止となっていた。そんな中で生徒からは「あいさつができる学校になるといい」「兄がい



資料5
あいさつ運動の様子

たときにあいさつ運動といって昇降口であいさつをする活動があったと聞いたので、やるといいと思う」という意見が挙がり、新型コロナウイルスの感染状況も考慮しながら令和5年度から再開することを決定した。1年生から3年生まで本校のあいさつ運動を経験したことがない生徒ばかりだったが、多くの生徒が昇降口にあつまり元気にあいさつをする様子が見られた(資料5)。生徒からは「朝、少し早く家を出るのは大変だけど、みんなとあいさつを交わすことで1日を気持ちよくスタートできる」「大きい声を出すのは苦手だけど、自分のあいさつに相手が笑顔で返してくれるのはすごくうれしい」といった声が聞かれた。あいさつ運動を再開したことで、廊下ですれ違う教師へのあいさつや、授業のはじめと終わりのあいさつなど、学校生活の中のあらゆる場面で、コロナ禍で少なくなってきた元気なあいさつが再び校内のいたるところで聞こえてくるようになった。

また、新型コロナウイルスの感染拡大によって中止となっていた様々な行事が少しずつ再開していくなかで、生徒から出た「学年をこえたつながりをもつことができる活動をしたい」という意見をもとに、「3年生から1年生へ上中清掃を教える」「体育祭での縦割り練習会」などの縦割りでの活動を令和5年度から実施した。

4月に行った3年生から1年生へ清掃の仕方を教える活動では、清掃の行程を確認しながら、実際に一緒に清掃をした(資料6)。3年生からは、「1年生に教えるということで、自分がちゃんと清掃できないといけないし、恥ずかしい姿は見せられないと思った」1年生からは「はじめはちょっと怖そうだなって思った先輩も、話してみるととても優しく、分かりやすく掃除の仕方を教えてくれた。明日から自分たちだけでやらないといけないので、教えてもらったことを思い出しながら頑張って掃除をしたい」という声が聞かれ、お互いの清掃への意識が高まっただけでなく、3年生にとっては先輩としての責任を感じるきっかけになった。



資料6
並んでぞうきんがけをする3年生と1年生

5月に行った体育祭では、縦割り練習会を実施した（資料7）。3学年が一緒に練習する中で、3年生から1、2年生にリレーのバトンパスはどうしたらスムーズにできるのか、玉入れの投げ方、長縄跳びの回し手がどう回すと跳びやすいのかなど競技のコツを伝える場面が多く見られた。「3年生が教えてくれた通りにやってみたら上手くできた」「先輩のおかげで新記録が出た」「先輩のアドバイスがすごくわかりやすかった」などの声が1、2年生からは聞かれ、3年生からは「どうやって伝えたら後輩たちが上達するのかを考えるのは難しかった」「自分たちが競技のポイントを整理することにもなったのでよかった」という声が聞かれた。体育祭本番では、縦割りの先輩、後輩を一生懸命に応援したり、結果発表で自分たちのことのように喜んだりする姿が見られた（資料8）。行事後の学校生活でも、部活動の大会の結果を聞いて「これってあの先輩だよな？やっぱりすごいね！」と話す1年生の姿や、「合唱コンクールは3組団で最優秀賞を独占しよう」と励まし合うなど、学年をこえたつながりが生まれた。

手立て2では、「どのような活動があると学校をよりよくなっていきたいという気持ちが高まるか」に対する生徒の意見について生徒会担当とタッグを組み、その意見を検討し、生徒会が主体となって実践した。あいさつ運動では、伝統として行われてきたものを復興し、元気なあいさつが学校に戻ってきた。縦割りの活動では、上級生からは先輩としての自覚や責任、下級生からは先輩への憧れが生まれ、学年間のつながりが強まった。アンケートに書いた自分たちのアイデアが実現されたことで、学校生活を前向きに捉え、よりよいものになったと感じることができたと考えられる。



資料7
後輩にバトンパスのコツを教える3年生



資料8
先輩を応援する1年生

6 終わりに

本研究は、生徒自身がきまりや学校がよりよいものになるように考え、その考えが実際に学校生活に反映されていくことで、きまりやルールを守るといった規範意識が高まり、学校生活のあらゆる場面で主体的に取り組めるようになることをねらいとしたものである。手立て1、手立て2によってねらいを達成することができた。

学校生活における生徒の思いや考えを反映することで、主体的に学校生活を送ることができることを検証した。依然として学校に足が向かない不登校生徒が多いが、中には少しずつ教室で級友とともに授業を受けることができるようになった生徒も出てきた。令和4年度中、相談室で過ごしていたが新年度のスタートとともに教室で級友と過ごすことができるようになった生徒もいる。担任の先生方の根気強いはたらきかけによる部分が大きい。過ごしやすい環境、安心して過ごせる環境づくりによって、定着できたのではないかと。生徒指導提要では、不登校対策として、全ての児童生徒にとって、所属クラスが安心・安全な居場所とする取組、個々の学びを保障する分かりやすい授業の工夫やクラスが安心して快適に過ごせるような雰囲気づくり、居場所づくりが求められている。そのためには、生徒だけでなく保護者や地域の声にも耳を傾けていく必要がある。学校、家庭、地域が一体となって、生徒の思いを大切にしながら、今後も生徒たちが主体的に生活を送ることができる学校づくりを進めていく。